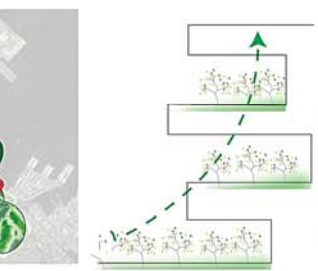
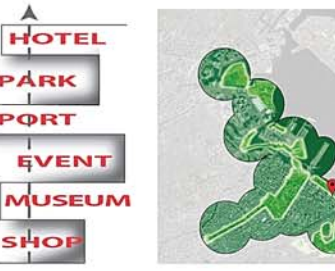
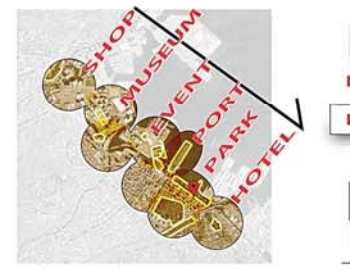
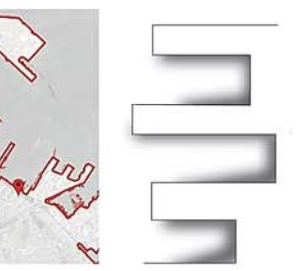
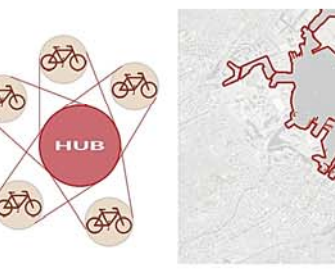
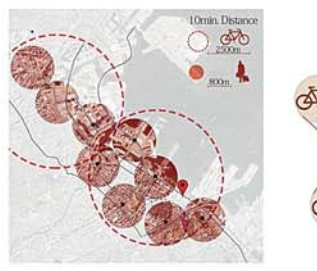




2階から外を見る：アツ上の芝生と樹木が、山下公園と海の景色と連続する

ギャラリーから内部をみる：凸凹の壁が噛み合うことで立体的な視線の動きを生み出す

カフェから外を見る：人々の活動が活気ある空間、都市の賑わいを体感する



開港以降、横浜は多くの文化や人々を受け入れ、魅力的な観光都市として発展してきた。また近年では、レンタサイクルを媒介とし、都市スケールでの観光が容易な街の構成となっている。今回の対象敷地は、横浜から山下公園周辺を都市スケールで連続的に捉えたとき、終着点としてのポテンシャルを持つ場所に位置している。

歴史的に港町として栄えた横浜には、海に突き出るように埠頭や波止場、そして、陸に囲まれたようにドックが、数多く今でも名残を残すように存在している。陸と海の入り組んだ平面的な横浜の都市構成を、この建物では断面的に捉えることで、凸凹な形態を持った建物が内部と外部を繋ぎ、都市に向かって開く。

横浜は、横浜駅から山下公園周辺まで、様々な特徴を持ったエリアが連続的に移り変わっていく。この建物のプログラムは、そのエリアが移り変わるようにプログラムを立体的に配置することによって、都市の流れを引き込んでいく。積み重なったプログラムは横浜をめぐるように人々を上へと誘導していく。

横浜の臨海部には多くのオープンスペース、日本大通りや大通公園には並木道が立ち並ぶ。これらが連続的に都市に配置されていることで、横浜のまち全体をつなぐランドスケープとなっている。この建築では、このランドスケープと連続するように立体的に緑を配置し、都市の人の流れを引きこむ。

観光センターには、宿泊と日帰りの外国人を中心とする観光客と地域住民、そしてサイクリストの4つをターゲットに対してプログラムを配置する。横浜を初めて訪れた外国人観光客は観光センターでヨコハマを体感する。また、上層のホテルにも宿泊でき、ホテルの共用空間では横浜の旅を共有し合う。1Fでは横浜を巡るサイクリストのためのサイクルショップを配置する。ワークショップスペースでは近隣住民のための会議や集会に使用できる。

でっばりには屋内施設、凹みの空間に野外施設をそれぞれ配置し、凸凹を立体的に組み上げた。動線は凸凹のシーケンスによってつくり、来訪者を上へと導く。凸凹に折り曲げられた2枚のコンクリートスラブのかみ合いによって空間を造る。陸側に配置したコアと、木と鉄骨のハイブリッドトラスがコンクリートスラブを支える。

空へ伸びる波止場

凸凹が繋ぐヨコハマ ランドスケープ

多様なエレメントが詰まった横浜に現れる、最もヨコハマらしい建築。横浜は、たくさんの埠頭が海に向かって突き出している。それは、より多くのヒトやモノを受け入れようということの表れである。横浜を訪れる観光客は、この凸凹に沿って配置された様々な観光地や気持ちの良い緑のランドスケープによって導かれ、めぐる。

この建築はそうした横浜のアイデンティティを都市と連続するように組み上げ、訪れる観光客は立体的なランドスケープをめぐることで横浜を体感する。海へと伸びる波止場は、未来に向かって空へと展開していく。



観光センターには、宿泊と日帰りの外国人を中心とする観光客と地域住民、そしてサイクリストの4つをターゲットに対してプログラムを配置する。横浜を初めて訪れた外国人観光客は観光センターでヨコハマを体感する。また、上層のホテルにも宿泊でき、ホテルの共用空間では横浜の旅を共有し合う。1Fでは横浜を巡るサイクリストのためのサイクルショップを配置する。ワークショップスペースでは近隣住民のための会議や集会に使用できる。

